

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 建造物部会(第 34 回)

日時：令和 6 年 3 月 4 日 (月) 10:00～12:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

(1) 表二の門発掘調査成果について <資料 1>

4 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議
石垣・埋蔵文化財部会（第59回）、建造物部会（第34回）
出席者名簿

日時：令和6年3月4日（月）10:00～12:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

■石垣・埋蔵文化財部会

（敬称略）

氏名	所属	備考
北垣 聡一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長 元愛知淑徳大学非常勤講師	副座長
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	

■建造物部会

（敬称略）

氏名	所属	備考
小濱 芳朗	名古屋市立大学名誉教授	座長
溝口 正人	名古屋市立大学大学院教授	副座長
野々垣 篤	愛知工業大学准教授	
麓 和善	名古屋工業大学名誉教授	

■オブザーバー

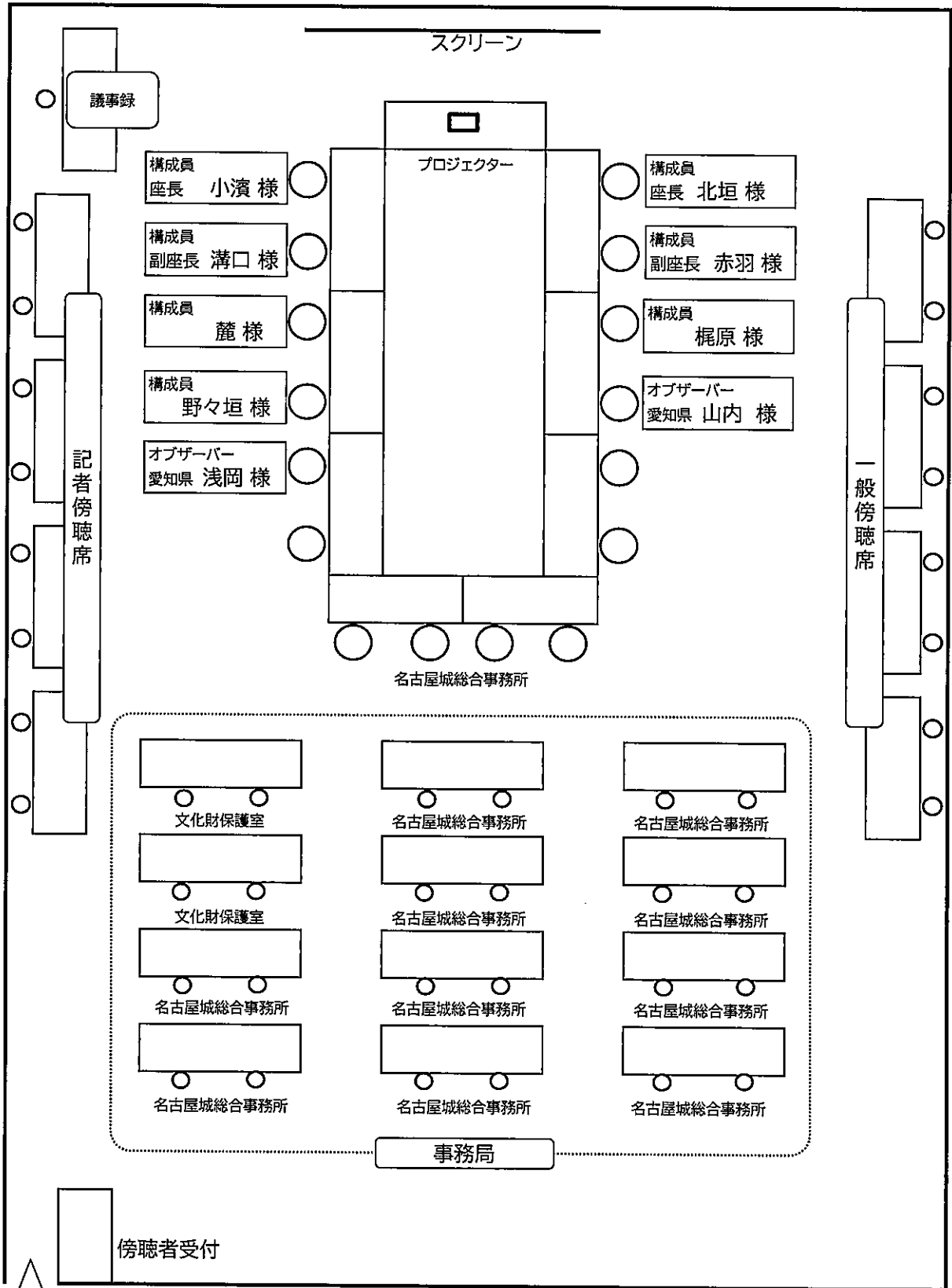
（敬称略）

氏名	所属
浅岡 宏司	愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室主査
山内 良祐	愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議
 第59回石垣・埋蔵文化財部会、第34回建造物部会

座席表

令和6年3月4日(月)
 10:00~12:00
 名古屋能楽堂 会議室



表二の門発掘調査成果について

1 令和5(2023)年度発掘調査成果

(1) 調査の概要

ア 調査目的

- ・ 雁木の復元整備を検討するため、積み直し後の雁木の段数や構造、附属土塀との関連などの情報を収集する。
- ・ 試掘調査で出土した切石が土塁中央部に残存しているかを確認し、構造の確認と切石の設置時期について検討を行う。
- ・ 当初の雁木や積み直し後の雁木など変遷過程に伴う遺構を確認し、石垣の積み直しの可能性、雁木の構築過程の解明を行う。

イ 調査期間

令和5年(2023)8月21日～9月27日 [25日間]

※9月16日(土)に市民向け現地説明会を実施し、約350名が参加

ウ 調査箇所

表二の門附属土塀背面の土塁全面を調査範囲とした [計80㎡] (図1)

※調査範囲内に令和元(2019)年度調査区、令和4(2022)年度調査区を含む

(2) 調査成果の概要

- ① 土塁の裾部にて、雁木の最下段と考えられる一連の切石を検出した。
→東側土塁の切石には矢穴長が短い矢穴痕がつき、江戸時代中期以降のものと考えられる。
- ② 土塁の斜面部にて、雁木の背面構造と考えられる円礫を一面に検出した。
→円礫の検出レベルと雁木推定ラインが一致する箇所があり、一部では雁木設置時の状態が残存していると考えられる。
- ③ 土塁の各所にて、後世の改変の痕跡を多く確認した。

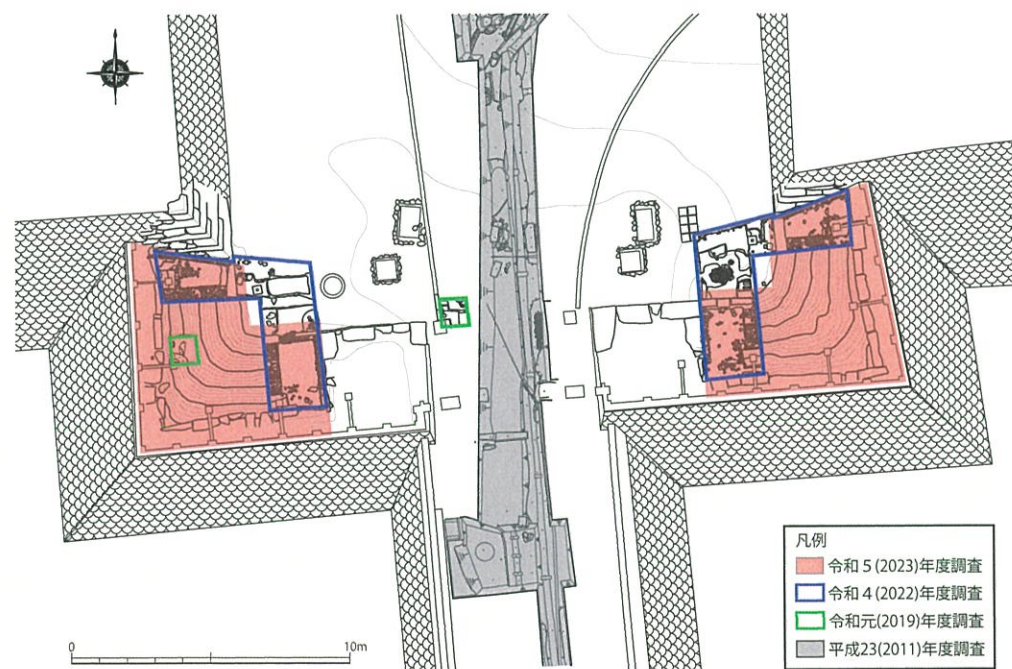


図1 調査区位置図 (既往調査を含む)

(3) 出土遺構の評価

ア 切石

- ・ 両側の土塁裾部にて、昨年度の試掘調査で出土した切石と連続する切石を検出した。築城当初の雁木ではなく、積み直された雁木の最下段と考えられる。
- ・ 出土した切石は計12石となり (ほか抜取痕1箇所)、すべて花崗岩であった。
- ・ 入隅部では奥行が短い切石 (約15.0～18.0cm) が含まれていることを確認した。
- ・ 東側土塁入隅部の切石には矢穴長約4.0～5.5cmの矢穴痕がみられた。江戸時代中期以降の矢穴と考えられるため、この切石は雁木積み直し時に新たに入れられた可能性がある。
- ・ 2段目の雁木は最下段の上面に乗ると考えられるため、最下段の踏面は奥行の短い切石に合わせて約15.0～18.0cmと想定される (2段目以降は蹴上約30cm踏面約27cmか)。



図2 東側土塁 完掘状況 (北西から)



図3 西側土塁 完掘状況 (北東から)



図4 東側土塁 入隅部切石出土状況



図5 西側土塁 入隅部切石出土状況



図6 東側土塁 矢穴長約4～5cmの矢穴



図7 二之丸東二之丸門雁木 入隅部・最下段

イ 円礫

- ・ 両側の土塁斜面部にて、面的に円礫を検出した。円礫は雁木の背面に詰められていたものと考えられ、検出状況は雁木撤去時の状態を示している可能性が高い。
- ・ 検出面が垂直・平坦に近い箇所があり、雁木推定ラインを比較すると一致する箇所があった。このため、部分的に雁木設置時の状態（背面構造）が残存していると考えられる。
- ・ 円礫の岩石種調査を行ったところ、石質の割合・礫径の分布が庄内川中流域と類似した。同様の調査を行っている本丸搦手馬出石垣の栗石では、庄内川からの採取は天和期の栗石にみられる。この調査成果及び円礫中に瓦片が混じることも考慮すると、検出した円礫は雁木の積み直し時に搬入されたものと考えられる。
- ・ 検出面では円礫と土が混じる状況であったが、東側土塁天端にて深堀りを行ったところ、検出面から約 30cm 下で円礫のみの層を確認した。当初の背面構造の可能性はある。

ウ 控柱根固め

- ・ 土塁斜面部にて円礫を検出するなかで、控柱下端付近では比較的大きい角礫・円礫が集中してみられた。控柱の根固めと考えられ、すべての控柱下端で確認した。
- ・ 根固めは現在の控柱直下に単一のものしか検出されなかった。根固めは円礫の検出面を掘りこんでいることを確認したため、雁木撤去後に設けられたと考えられる。

エ 切石直下の石列

- ・ 東側土塁の切石直下では、切石下端より約 20cm 下に砂岩の割石 2 石が面を揃えて出土し、さらにその下に高さ 50cm 以上の花崗岩の切石 2 石が横並びで出土した。深さ約 1 m では粘質土と円礫を検出したため、何らかの遺構と考えられるが性格は不明である。



図 8 西側土塁 円礫・根固め検出状況



図 9 東側土塁 天端サブトレ円礫検出状況



図 10 東側土塁 切石直下サブトレ検出状況



図 11 東側土塁 切石直下サブトレ下端検出状況

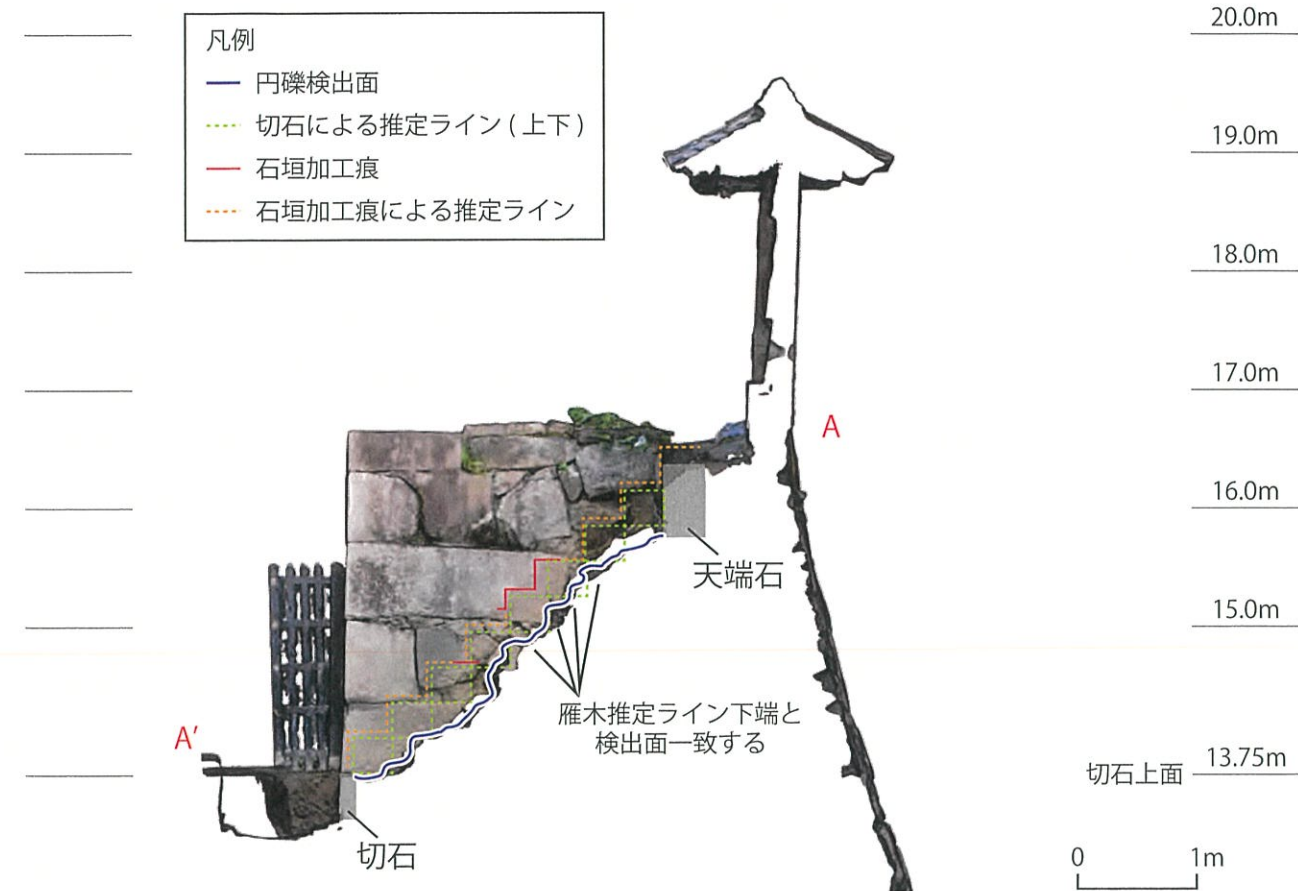


図 12 A-A' 断面 見通し図による雁木の断面位置の検討

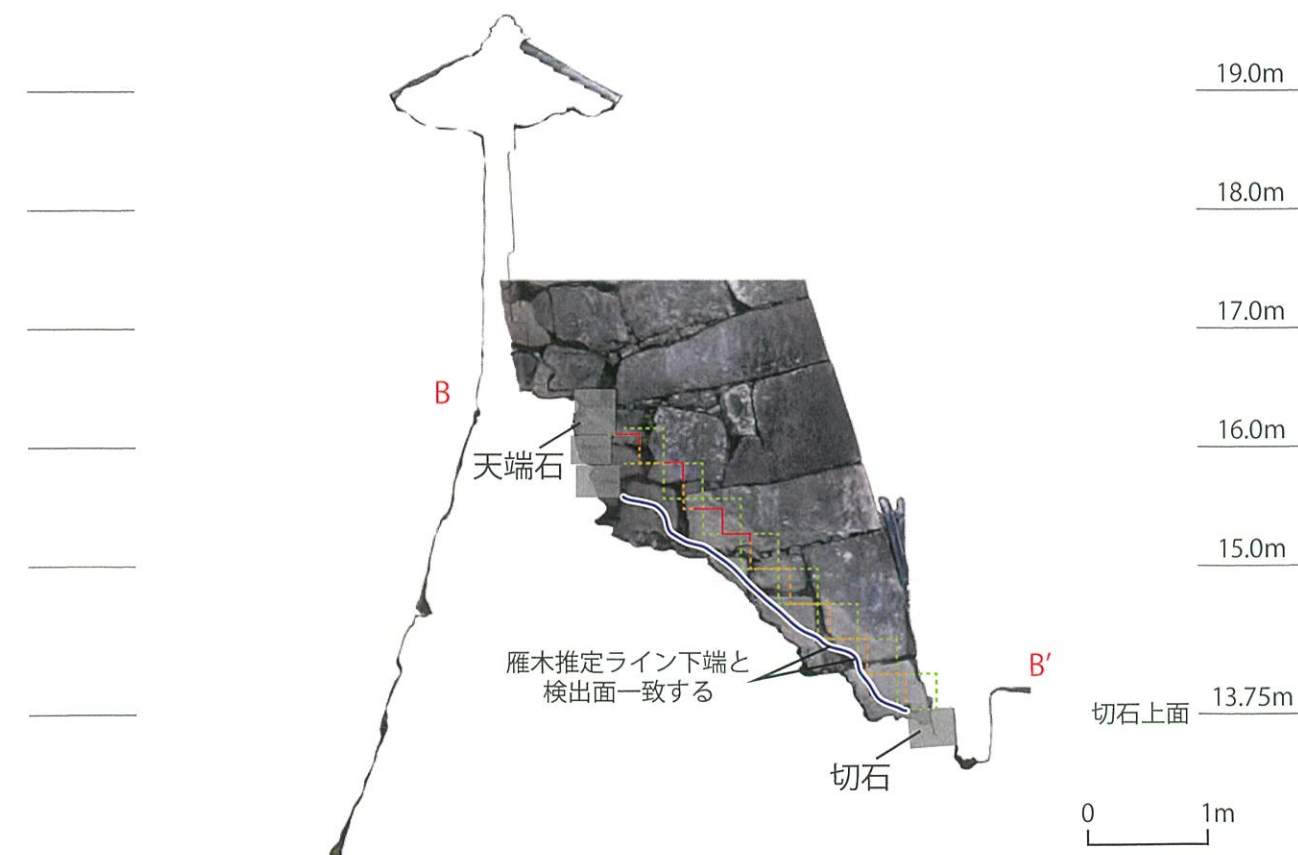


図 13 B-B' 断面 見通し図による雁木の断面位置の検討



図14 表二の門発掘調査平面図

(4) その他の評価

ア 土塀背面の平場 (武者走り)

- ・土塀背面にみられるような平場は今回の発掘調査で確認できなかった。
- ・『金城温古録』では土塀背面に平場が描かれているが、城内の事例をみても平場は確認できていない。
- ・平場は存在せず、雁木の上で鉄砲や弓矢を構えることを想定していたと考えられる。

イ 近世の生活面

- ・切石側面では上部の変色もしくは整形度の差がみられ、ある時期に露出していた部分を示すと考えられる。変色の境界レベルは標高約 13.5～13.6m であった。
- ・令和 5 (2023) 年度調査では後世のかく乱によって近世の生活面は確認できなかったが、平成 23 (2011) 年度の調査で近世以降～明治時代中頃の地表面が標高約 13.6m と確認しており、門鏡柱での地表面 (門扉接地レベル) も約 13.6m と切石の変色レベルと一致する。

ウ 後世の改変

- ・昨年度の試掘調査と今回の発掘調査で表二の門附属土塀の改変に関する多くの痕跡を確認することができた。修理記録との対応を含めて図 19 に整理した。
- ・発掘調査から修理記録にない改変も確認しており、東側土塀の控柱下端に鉄製ボルトが刺さる状況、天端石の下に控柱の根固めが入り込む状況などがあった。
- ・明治 24 年 (1891) に発生した濃尾地震直後の古写真と現況を比較すると、土塀の狭間の位置が異なっており、昭和 15 年 (1940) 頃に撮影されたガラス乾板写真では現況と同じのため、その間に土塀が建替えられたと考えられる。

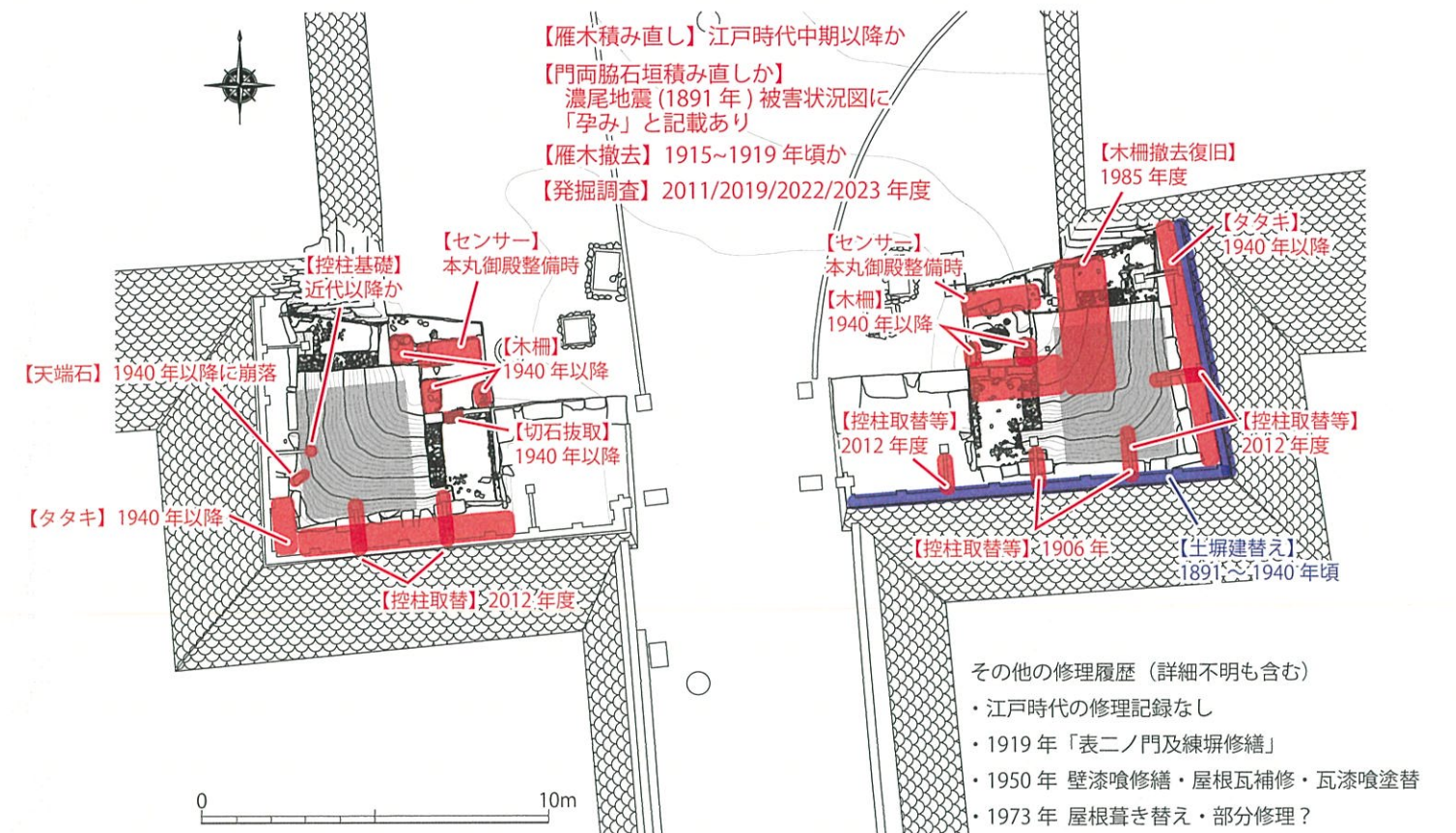


図 19 表二の門附属土塀における後世の改変まとめ



図 15 西側土塀 土塀背面検出状況

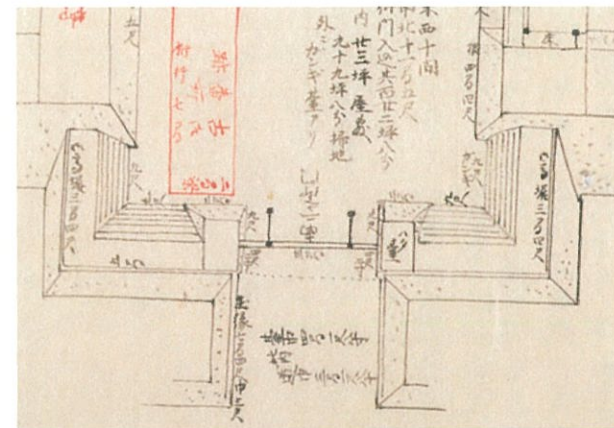


図 16 『金城温古録』表二の門 (名古屋市蓬左文庫蔵)



図 20 東側土塀 天端石の下に根固めが入り込む



図 21 西側土塀 控柱下端の鉄製ボルト検出状況



図 17 二之丸東二之門の土塀天端



図 18 西側土塀 切石側面の変色



図 22 昭和 15 年頃撮影の表二の門 (名古屋城総合事務所蔵)



図 23 表二の門現況写真

2 その後の調査

(1) 土塀の当初の構造について

- ・現在の土塀は濃尾地震後に建替えられたものであることから、それ以前の近世の土塀について検討した。
- ・現在の表二の門附属土塀は厚さ約 20 cm である。
- ・他城で現存する高麗門附属土塀には、江戸城田安門・清水門・外桜田門、金沢城石川門、大坂城大手門・桜門、丸亀城大手門があり、どれも控柱がついた土塀となっている。
※江戸城清水門・田安門土塀は厚さ 21cm、金沢城石川門土塀は厚さ 21cm、丸亀城大手門土塀は厚さ 24cm
- ・表二の門附属土塀の天端は天端石を含めて幅 80cm 程度。一方で、築地塀がつく姫路城土塀の天端は約 120cm のため、姫路城と同様の築地塀とするには狭い。
- ・控柱がついた土塀は木造である一方で、築地塀は版築によって造られるため、両者では構造が大きく異なる。
- ・『金城温古録』で土塀の背面が描かれているのは不明門のみで控柱が描かれている。そのほか城内各所でも控柱のついた土塀が描かれており、築地塀と明記されているのは南蛮練塀のみである。

(2) 石垣の積み直しについて

- ・土塀直下の石垣が築城時から積み直されているかについて検討した。
- ・明治 24 年 (1891) の古写真と現況の石垣は一致するため、これ以降の積み直しはないと考えられる。
- ・石垣を石材／矢穴／刻印／石材加工／石積み技術の要素から観察を行った。
- ・【石材】上部から下部にかけて築石には花崗岩・花崗閃緑岩・砂岩が用いられており、目立つ傾向は見られない。ただし、天端石には岩崎山産の花崗岩（細粒～中粒の花崗岩）を複数確認した。岩崎山産花崗岩は本丸搦手馬出石垣で天和期の積み直しに用いられる。
- ・【矢穴】矢穴長が約 8～15cm（オルソ画像での算出）の矢穴痕を確認し、5 cm 程度のものは確認できなかった。
- ・【刻印】刻印については上部から下部にかけて点在しており、傾向は見られなかった。
- ・【石材加工】四角形もしくは多角形に加工。スタレ・ノミ切痕が見られる。
- ・【石積み技術】一部で横目地通るが乱積み。角石は上 2 段ほどで勾配が急になる。

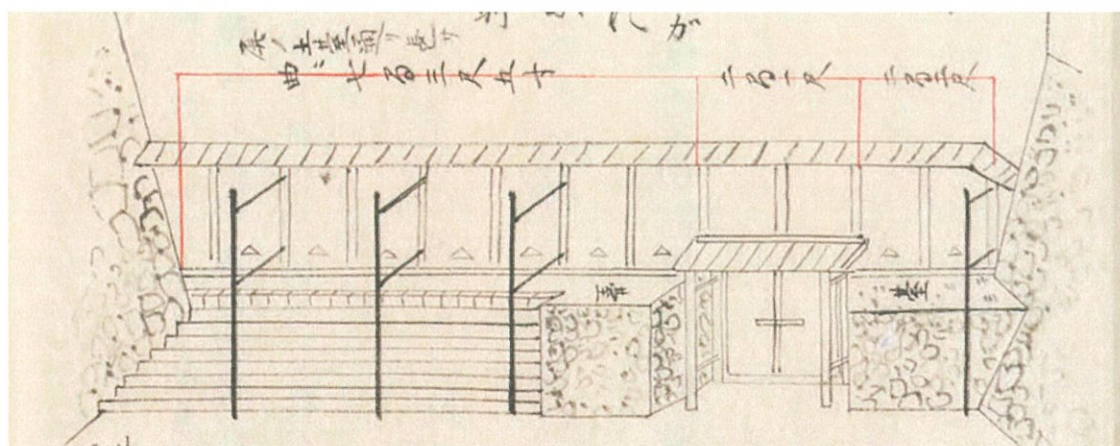


図 24 『金城温古録』不明門（名古屋市蓬左文庫蔵）

3 調査成果のまとめ

(1) 調査成果のまとめ

- ・雁木が存在した痕跡について、①最下段の切石、②背面構造の円礫（部分的に設置時の状態が残る）、③石垣面の階段状の加工痕を確認できた。
- ・最下段を確認できたことで、雁木の下端の根拠となり、1 段の寸法についても情報を得ることができた。厚さの薄い切石・側面の変色から最下段の露出部を確認することができた。
- ・最下段の切石には化粧面が返されているものや矢穴長の短い矢穴がつくものを確認したため、雁木は築城時から江戸時代中期以降に積み直されていると考えられる。
- ・背面構造の円礫には瓦片が混じり、土砂と混合しているが、その下には円礫のみの層があり、築城時の背面構造は円礫のみのものであった可能性がある。
- ・石垣調査から江戸時代に積み直されていると考えられる。明治 24 年 (1891) の古写真からそれ以降に土塀が建て替えられていること、石垣は現況と一致することが確認できた。
- ・雁木のさまざまな痕跡を確認できた一方で、どれも部分的な残存であったため、全体の解明には至らなかった。

(2) 整備の方針について

- ・調査によって雁木の情報が多く得られ、学術的な評価が一定程度整理できたため、今後の表二の門大規模修理工事に合わせて雁木の整備を行っていく。
- ・整備においては、現状の土塀・石垣・出土した雁木最下段をもとに、江戸時代中期以降から大正 4 年 (1915) 頃に存在したと考えられる姿に復することを前提として検討を進める。

(3) 今後の整備に向けた課題

- ・雁木の段数はいくつかの案があり、土塀や天端への据え付きから検討していく必要がある。
- ・雁木最下段をもとに 2 段目以上を復元する場合の勾配と遺構保護層の設定方法を検討していく必要がある。出土した雁木最下段の再利用／保護を検討する必要がある。
- ・控柱の下端が土中に入って掘立柱となるか、雁木の上に乗るのか検討していく必要がある。

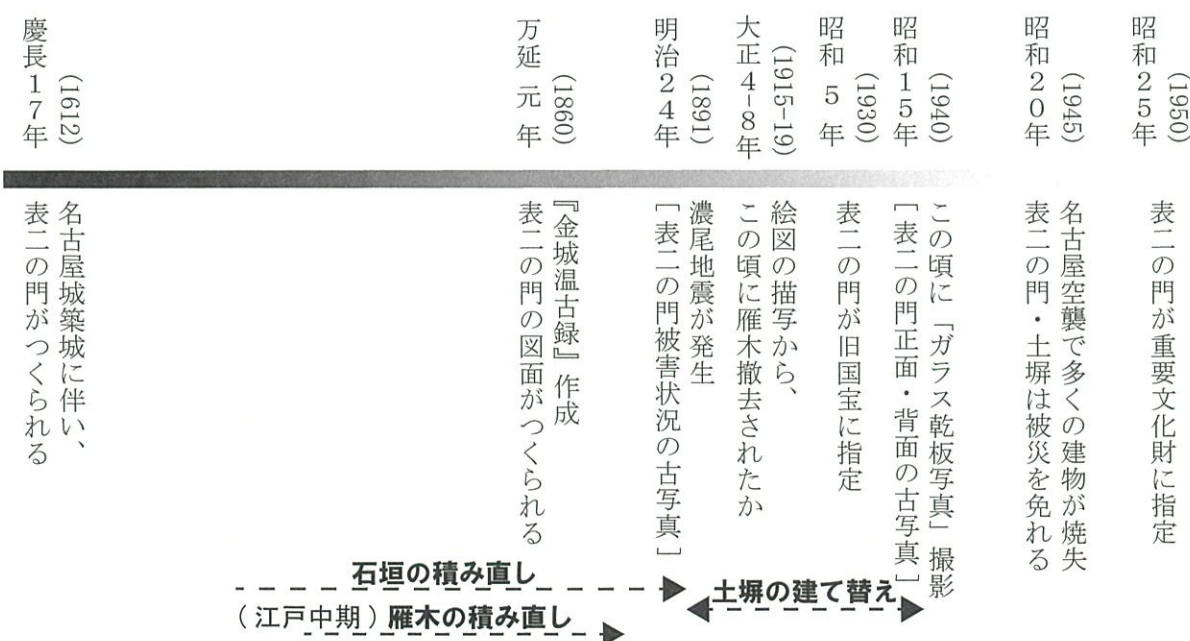


図 25 表二の門の変遷



西面石垣 (002H)

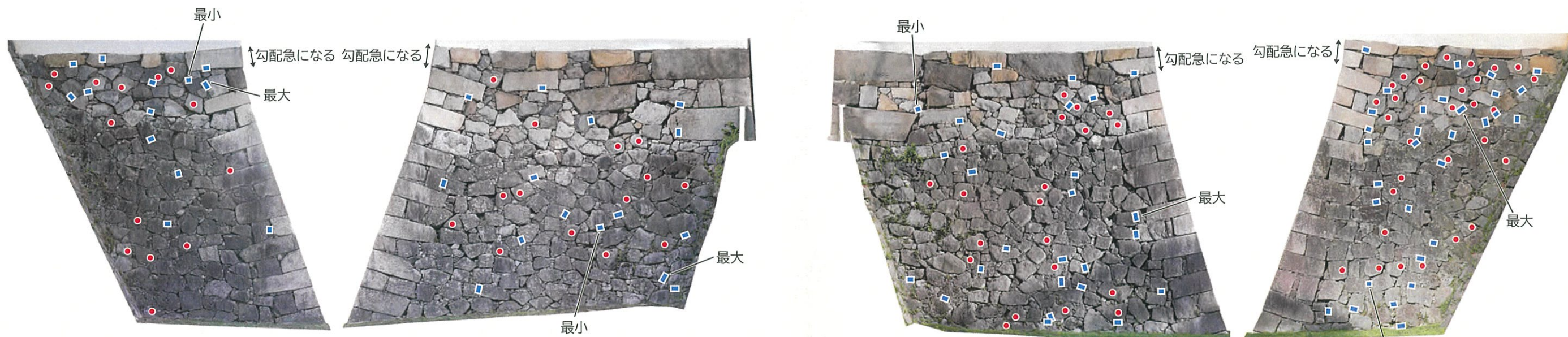
南面西側石垣 (002H)

南面東側石垣 (017H)

東面石垣 (018H)



図 26 表二の門石垣調査【石材】



西面石垣 (002H)

南面西側石垣 (002H)

南面東側石垣 (017H)

東面石垣 (018H)

【矢穴】 最大：約 13cm、最小約 7 cm
 【石材加工】 四角形もしくは多角形に加工
 築石の大きさおおよそ均一
 スダレ・ノミ切り痕を確認
 【石積み技術】 上部や下部で横目地通る箇所も
 あるが、乱積み

【矢穴】 最大：約 15cm、最小約 8 cm
 【石材加工】 四角形もしくは多角形に加工
 上部は大きな石材混じる
 スダレ・ノミ切り痕を確認
 【石積み技術】 上部は横目地通るが、下部は通
 らず、乱積み

【矢穴】 最大：約 14cm、最小約 8 cm
 【石材加工】 四角形もしくは多角形に加工
 上部は大きな石材混じる
 スダレ・ノミ切り痕を確認
 【石積み技術】 上部は横目地通るが、下部は通
 らず、乱積み

【矢穴】 最大：約 14cm、最小約 7 cm
 【石材加工】 四角形もしくは多角形に加工
 築石の大きさ均一
 スダレ・ノミ切り痕を確認
 【石積み技術】 横目地通らず、乱積み



図 27 表二の門石垣調査【矢穴・刻印・石材加工・石積み技術】